

2018.7.13D-TaC 集会「えらいこっちゃで 大阪の教育」・トーク骨子より（公開可）

1. タイトルが「えらいこっちゃで 大阪の教育」になった理由

集会の主催団体 D-TaC (Democracy for Teachers and Children) は、私の「君が代」不起立処分撤回と学校に民主主義をとりもどすことを目的として、3 年前の 7 月 13 日に結成した市民団体です。その後、毎年 7 月 13 日に総会を兼ねた集会を開いてきました。集会準備の D-TaC ミーティングの中で、処分取り消しを求めた大阪市人事委員会の公開審理が秋にも始まるという状況の中で、傍聴に来てもらえる人を増やしたい、そのためにも、この問題にふれるのが初めてという方にも参加いただき、「日の丸・君が代」強制に始まる維新支配下の大阪市立学校教育のひどい実態とそこでの「君が代」強制反対運動の意義を伝える集会にしたいということになり、このタイトルに決まりました。

2. 教師になった背景やいきさつ

広島県山間部の過疎の村で育ち、高校は山を越えた町の高校に行きました。1 日にバスが 3 本しかないという通学の不便から 1 年生の 2 学期から高校に付属していた寮に入って生活しました。それまで積極的に人と関わることは苦手だったのですが、ひょんなことから生徒会の活動に参加することになり、その後、大学での学生運動にふれる中で、能力主義教育とそれが浸透している社会の目の中で、自分が人間的にゆがめられてきたと自覚するようになりました。人をテストの点数で評価する能力主義には反発しつつ、一方、自分がまわりの人からどう評価されているかは気になる。素直に思ったことを口にして人とつながることができずに、感情を十分に育てきれていない自分の姿を自覚するようになったということです。それを変えたいという衝動が自分を運動参加に導いたと考えるようになりました。現在の社会・教育の中で困難を抱える人とつながって、その現実を変えていく努力をすることの中に、自分の変革もあるのではと考えて、地域に暮らすいろんな生徒が集まる中学校の教員になろうと思いました。

3. 松田の大阪市立学校教員としての経過（資料 1）

中学校理科で大阪市の採用試験を受けましたが、1980 年 4 月、新規採用で配属されたのは、新設 3 年目の S●●養護学校でした。高等部所属となり、4 年勤務しました。1984 年 4 月に、T●●●中学校に転勤して 10 年勤務、その後、D●中学校、T●中学校に 10 年ずつ勤務してから、60 歳定年まで 2 年を残して N●中学校に転勤しました。定年時に再任用を希望し、2016 年 4 月から U●中学校で働いて 3 年目です。

4. それぞれの学校で印象に残っていること（資料 1）

S●●養護学校では、生徒とのふれ合いを通して、「障害」からでなくその人個人をみて

かかわることの大切さをまなび、「障害者」をとりまく現実のきびしさ、作業所づくり等の親の取り組みにもふれました。T●●●中学校では、在日朝鮮人生徒や生活の厳しさを背景に「荒れる」生徒の現実にもふれました。指紋押捺拒否の運動にも出会い、天皇死去に対する弔意強要反対や大喪の礼・学校休業反対の自主登校運動等にもふれました。D●中学校は、転勤したとき、「日の丸」も「君が代」もない学校で、私の在任中に、卒業式・入学式の「日の丸」掲揚や国歌斉唱導入をめぐるいろいろな論議・経験をしました。T●●●中学校とD●●●中学校の20年間はずっと担任でしたが、T●●●中学校では最初の3年だけ担任で、後の7年は副担任でした。主に、同和教育（人権教育）主担者の仕事をしました。「評価育成システム」という勤務評価の制度が始まり、私は、自己申告表を提出しませんでした。東日本大震災と福島大原発事故があり、放射能・放射線についての理科教育についてとても考えさせられました。2012年2月に橋下市長の下で大阪市国旗国歌条例ができ、条例制定後の初めての卒業式（2012年3月）は、3年生所属でしたが、卒業証書を演壇に運ぶ係で「君が代」斉唱時は舞台裏でした。以降のT●●●中学校の卒・入学式では、不起立でしたが、校長は「知らない」ということで市教委に報告せず、処分はありませんでした。N●●●中学校では、転勤1年目に3年生の担任になり、2015年3月の卒業式の「君が代」不起立で2015年5月に戒告処分を受けました。7月に大阪市人事委員会に処分取り消しの審査請求を行うとともにD-TaCを結成してもらい、本日の集会につながっています。不起立で処分はされましたが、再任用され、今は、U中学校で初任者研修担当として働いています。授業は持っていませんが、新任の人の授業に入って、休みがちな生徒や授業についていくのが難しい生徒へのかかわりを模索しながら、大阪市の学校教育の課題を考えています。2017年4月から、人事給与評価制度の権限が大阪府から政令市である大阪市に移譲され、2018年4月からは大阪市が独自に、主務教諭を新設。教諭の2級給料表（161号給までであった）の74号給以上の給料は主務教諭にした適用しないとしています。また、相対評価の人事評価制度をもちこんでいます。

5. 大阪市の教育が大きく変わったと感じる時期（資料2、3）

大きな節目は、2006年12月の第1次安倍政権の下で強行された教育基本法の改悪（教育目標への愛国心・公共の精神の位置づけ、行政の教育介入に道を開く教育振興基本計画の義務づけ）ですが、大阪市の教育が大きく変わるのは、2011年11月の大阪府知事・大阪市長選のダブル選で維新が勝ち、橋下が大阪市長になってからですね。T●●●中学校で教えた頃です。その後、学校を、命令と服従、愛国心と公共の精神、自己責任と競争の場にするための条例がどんどん作られました。たとえば、大阪市国旗国歌条例（2012年2月）、大阪市職員基本条例（2012年5月）、大阪市教育行政基本条例（2012年5月）、大阪市学校活性化条例（2012年7月）、大阪市労使関係条例（2012年7月）、大阪市政活動規制条例（2012年7月）などです。これらの条例に沿って学校教育は大きく変えられていきました。大阪維新と下野中の安倍、そして日本会議を強く結びつけたといわれる、日本教育再生機構理

事長・八木秀次がコーディネーター役を務めた教育再生民間タウンミーティングは2012年2月26日でした。

6. 変化の内容（資料3、4）

まず、学校の教育目標とその評価のしかたが大きく変わりました。

就職したときからずっと、学校では、「教育指導の計画」を作成し、それにそって「中間反省」「最終反省」を行って教育活動を進めてきました。それは、市教委から示される「学校教育指針」を手がかりに、各学校で作成するもので、各部署での話し合いを基に、職員会議で確認・決定されてきました。

例えば、2004年度、T●中学校転任1年目の「学校教育指針」「教育指導の計画」の項目・主な内容は、以下でした。

＜学校教育指針＞（大阪市教委作成）

●基本方針…学校教育は、個人の尊厳を重んじ真理と平和を希求するとともに、民主的で文化的な社会の創造に貢献する人間の育成を期して推進されなければならない。各校園は、次の事項を基に、人間尊重の教育を一層深化充実し、知・徳・体の調和のとれた人間形成に努めることが大切である。

1. 民主的な社会の形成者として必要な人権尊重の精神と態度を養う。
2. 自ら学ぶ態度を育て、知性と創造性を養う。
3. 個性を生かし、豊かな情操を養う。
4. 健康でたくましい心身を育て、自律的な生活習慣や態度を養う。
5. 互いに敬愛し協力する集団を育て、社会連帯や国際理解の基礎を養う。

●重点課題…「生きる力」をはぐくむ教育活動を推進する

1. 自立心や自制心、思いやる心や感動する心、社会貢献の心などを育てる。
2. 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題を解決する力を育てる。
3. 自らの健康や体力に関心をもち、たくましく生きようとする態度を育てる。
4. 互いにちがいを認め合い、個性を尊重しあう集団を育てる。

＜教育指導の計画＞（T●中学校作成）

1. 学校経営の重点

「人間尊重の教育を基盤とし、基礎学力の充実をはかるとともに、「生きる力」をはぐくみ、心豊かな生徒を育成する」

2. 教科・道徳及び特別活動に関する指導の重点

ア.教科指導の重点…「授業を通し基礎・基本の充実につとめ、自ら学ぶ学習態度を育成する」

イ.道徳教育の重点…「人権尊重の精神と態度を養い、互いに思いやる集団をつくる」

ウ.特別活動の重点…「生徒の自主的活動を推進する」

エ.進路指導の重点…「生徒が自らを正しく理解し、自分の進路について深く考え、将来

展望に立った進路選択ができるようにつとめる」

3. 生活指導の重点 4. 健康管理と指導の重点 5. 養護教育の重点

6. 努力目標 7. 研修計画

※生徒の視点を、社会の問題にではなく、自分にだけ向けさせ、自己責任や愛郷心・愛国心を重視する流れは強まって来ていましたが、いろんな創造的な取り組みができる枠組みはありました。

今年度 2018 年度はどうか、全く違っています。市教委が示すのは、「学校運営の指針」で、学校が作成するのは「運営に関する計画」です。教育目標は、「大阪市教育振興基本計画」で定まっているので、学校がやることは、そこに掲げた大阪市全体の数値で示した『全市共通目標』に対して自分の学校がどう貢献するのかという観点で、現状を分析し、数値目標を立てることです。

大阪市の教育目標は、市長が教育委員会と協議して作成する教育振興基本計画で決めることが、前文で、自己責任と競争、愛国心・愛郷心の教育を実施することをうたった大阪市教育行政基本条例で決められています。市教委が教育振興基本計画に基づいて、学校運営の指針をつくり、校長が示された全市の数値目標に基づいて、学校の目標と目標を達成するための取り組みを決めた運営の計画を作成することが学校活性化条例で定められています。職員会議に決定権限はなく、司会は教頭、裁決はしてはならないとされています。

今年度（2018 年度）の市教委指示『学校運営の指針』…「大阪市教育行政基本条例の前文に基づいた『めざすべき目標像』と、その達成に向けて教育に携わる全ての人々が共有すべき『基本となる考え方』を基本的な目標とするとともに、2 つの『最重要目標』を明示する。」

『めざすべき目標像』…「すべての子どもたちが学力を身につけながら健やかに成長し、自立した個人として自己を確立し、他者とともに次代の社会を担うようになることをめざす。そのために、社会が多様化し激しく変化する中で、国際化の進展や未曾有の災害の発生を踏まえ、子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力を備えるようにする。」

『基本となる考え方』…「一人一人の子どもを、個人としての尊厳を重んじ、その意見を尊重するとともに、自由と規範意識、権利と義務を重んじ、自己の判断と責任で道を切り拓き、真理と正義を求め、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備え、グローバル化進む国際社会において力強く生き抜くことができる人間としてはぐくむこと」「子どもたちが、我が国と郷土の伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた国と、自らが育ったこの大阪を愛し、大阪にふさわしい新しい文化の創造をめざすようになること」

『最重要目標』…「(i) 子どもが安心して成長できる安全な社会（学校園・家庭・地域）の実現 (2) 心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上」

『全市共通目標』… (i) について→「学校で認知したいじめについて、解消した割合を 95% 以上」「小学校経年調査（校内調査）の『学校のきまり・規則を守っていますか』の項目

に肯定的に答える児童（生徒）の割合を〇%以上」「暴力行為を複数回行う加害児童（生徒）の割合を前年度より減少」「新たに不登校になる児童（生徒）の割合を前年度より減少」、(2) について→「小学校学力経年調査（中学生チャレンジテスト）における標準化得点を前年度より向上」「小学校学力経年調査（中学生チャレンジテスト）における正答率（得点）が市平均（府平均）の 7 割に満たない児童・生徒の割合を前年度より〇ポイント減少」「小学校学力経年調査（中学生チャレンジテスト）における正答率（得点）が市平均（府平均）を 2 割以上上回る児童（生徒）の割合を前年度より〇ポイント増加」「小学校学力経年調査（校内調査）における『学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか』に対して、肯定的に回答する児童（生徒）の割合を前年度より増加」「※全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点（教育振興基本計画指標）の向上に向けて体力向上に係る目標を各学校ごとに必ず設定」など。

「運営の計画」を担うための数値目標を教職員に設定させ人事評価を行う制度、学校評価を行う組織である学校協議会の設置、学校選択制や高校の学区撤廃…。公募区長・公募校長採用等、大阪市を大阪維新がのっとりとしたような状況の中で、学校同士、教職員同士を競わせるしくみがつくられていきました。

7. 大阪市の教育の現状について（資料 3、4）

現在の大阪市の教育は、競争に負けることへの恐怖心をあおることによって、指示に従順に従うこと、点数競争を強いられることをしかたないことと受け入れる児童・生徒の育成を目的にしていると感じます。また、育鵬社の中学校歴史・公民教科書を採択し、戦争を美化し、改憲をあおっています。露骨な国や大企業のための人材づくりの教育であると思います。私たちは、そのための歯車とされているのです。大阪市は、維新支配の下、安倍政権のやろうとしている教育改悪・教育支配を全国の最先端で具体化する実験場のような存在になっていると感じています。

8. 教育はどうあるべきか？（資料 2）

改悪前の教育基本法第 1 条・教育の目的は、「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」でした。第 10 条・教育行政の項には「教育は不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである」とありました。戦前の教育の反省に立って、教育における大事な原則が規定されていたと思います。教育は児童・生徒自身のためのものであって、国や大企業のためのものではない、教育は国・行政の支配から独立していなければならないということです。国民全体に直接に責任を負って教育を行うのは教員です。私たち教職員は、国・行政の支配に無批判に従うことは許されず、自分の権利を主

張するとともに、児童・生徒の権利を擁護し、現在の国と社会の状況の中で、児童・生徒がどんな状況におかれているのか、児童・生徒自身のための教育とはどうあるべきか、現実から学び、常に考えていく必要があるのだと思っています。

9. 松田が努力してきたこと

就職当初から、私たちは、国や企業のための人材づくり、そのための振り分けという役割を担わされていたことは否定できません。高校の内申書は、10段階の相対評価で、その振り分けをやらざるを得ませんでした。教育基本法の美しい条文の下で、実際は、いい学校に進まなければ未来がないかのような価値観のもとでの教育が行われているという現実が確かにありました。しかし、それに抗う教育は模索できたし、それを学校の教育目標に位置づける余地もありました。たとえば、2010年の都島区人権教育実践交流会に、私が人権教育主担者をしていたT●中学校から『一番大切なことは、喜び・悲しみを分かち合える仲間がいること』卒業を前にした中学校3年生での野宿者問題学習』と題する実践報告を出しました。3年間の人権学習（「戦争と平和の問題に対する学習」「在日外国人問題にかかわる学習」「障害者問題にかかわる学習」等）について紹介するとともに、特に、「野宿者問題学習」を中心に報告しました。

この学習は、「ホームレスと出会う子どもたち」というDVDを観て、自身も野宿経験があり、当時、夜回り活動や若者就労支援事業にかかわっていた人の経験を聞くというものでした。感想をいくつか紹介します。…

『Nさんお話を聞いて、生きていく中で一番幸せなものは、お金でも、自分の思い通りにいくことでもなく、悲しいことや辛いことや嬉しいことがあったとき、いっしょにその悲しみや喜びを分かち合える仲間がいることなのだと思います。だから、今いるT●の仲間やこれから出会う人たちを大切にしようと思いました。』という感想は、経済的な問題で私立中学校から公立のT●中学校に転入してきた生徒の感想です。今までの価値観を揺さぶるものであり、今後の彼女の人生にきっといい方向で影響する学習だったのではないかと嬉しく思いました。

この実践報告では、職員会議に提案し、承認された「T●中学校の『人権・道徳』にかかわる学習について」という文書についても紹介しました。『どの生徒も、かけがえのない自分の価値を自覚してほしい』そして、『一方で、すべての人たちが幸せに生きていくことのできる社会の実現を願いながら、自分の行動を考えられるようになってほしい』との思いをもって、『人権・道徳』にかかわる学習を進めていきたい。」とした文書です。当時は、まだ、人権教育について論議する場があり、このような文書を学校の立場として確認することもできていたわけです。

10. 教員生活の中で大切にしてきたこと

生徒たちは、今の社会の中で、多くの場合、使い捨てられ、人間としての誇りが持てな

い状況に置かれることになります。私は、そんな生徒たちと同じ側で生きる教員でありたい、一人一人の生徒が社会の真実に目を開き、自分自身の価値観を確立し、誇りを取り戻していく過程、自分の願いを実現するための手段としての知識・学力を手にしていく過程に助力できる教員でありたいと思ってきました。そして、その思いにつながる同和教育・人権教育の実践の中から、自分が差別される人の側に立とうとすると、差別を「常識」とする社会からの攻撃・不利益を受けるために、それを避けようとして自分も差別する側に回ってしまうという「差別を温存する構造」があることに気づきました。そして、「自分の保身のために、他の誰かに犠牲を強いることはしない」ということを行動原理にしたいと思うようになりました。

1.1. 「日の丸・君が代」強制の経過と取組み（資料5）

「日の丸」「君が代」は、侵略戦争時、大日本帝国が押し立てた旗・歌であり、戦争動員の国内体制をつくる上で大きな役割を果たしたものです。それを卒業式・入学式をはじめとした学校行事に持ち込もうとする動きには、教育は生徒一人一人のためのものでなく、国のためのものだということをはっきりさせたい国・文科省（文部省）の意図を感じて、そういう動きがあるたびに反対してきました。私にとっては教員生活の中でずっと大きなテーマでした。

「日の丸・君が代」強制の大きな節となったのは、1985年8月文部省初等中等教育局長「国旗国歌徹底」通知、1989年3月告示の学習指導要領改訂、1999年8月の国旗国歌法制定、2012年2月の大阪市国旗国歌条例と同年5月の大阪市職員基本条例制定（大阪府は2011年6月と2012年3月）でした。

1989年告示の学習指導要領改訂で、それまで、「国民の祝日などにおいて儀式などを行う場合には、…国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」から「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする」と変更し、卒業式・入学式を指定して、「国旗掲揚・国歌斉唱」を義務付ける規定としました。そして、それを契機に、大阪でも、卒業式・入学式の国旗掲揚・国歌斉唱実施の圧力が強まりました。一方、私の方も、1989年1月の昭和天皇死去・代替わりの過程での弔意強要の現実直面し、「君が代」起立斉唱強要に屈することは生徒たちに「ともに生きよう」と呼びかける言葉を失うことと感じて、絶対譲れない問題との思いを強くしていました。

生徒に伝えていく重要性を認識したのはD●中学校のときです。1994年4月に転勤したD●中学校は、転勤時点で「日の丸・君が代」が一切ない学校で、その後、管理職による「日の丸・君が代」を持ち込もうとする動きに対して抵抗することになりました。国旗国歌法制定後、式の中に持ち込まれることが避けられない状況になる中で、自分の譲れない一線を、判断するのは生徒自身という立場で、「日の丸・君が代」についての歴史的事実を伝えることに置き、実践してきました。国旗国歌条例制定と職務命令による起立斉唱強制で「日

の丸・君が代」強制の本質・目的がさらにはっきりしたと感じています。

参列者全員が、「日の丸」に敬礼、「君が代」を起立斉唱する式を強制によって演出することで、児童・生徒に、国旗・国歌が象徴する国を、絶対のもの、神聖なもの、従うべきものと感得させることを目的としているということです。そして、教職員に敬礼、起立斉唱させることを通じて、戦前の侵略戦争やその戦争に子どもたちを動員した戦前の教育への反省を学校教育から消し去ることです。歌詞がある「君が代」の意味も教えずに歌わせているのは、「君が代」の歌詞について「我が天皇陛下のお治めになる此の御代は、千年も万年も、いや、いつまでもいつまでも続いてお栄になりますように」という意味だと教えた事実、「君が代」が、天皇のために命を捨てることを最高の美德と教えた教育の重要な柱だったという事実を、児童・生徒（国民）に知らせないことが国策なのであり、その事実を伝えること自身が闘いであると思っています。

2014年4月、58歳で転勤したN●中学校で3年生の担任となり、「日の丸・君が代」にかかわる事実を生徒に伝えることが必要なことを主張し、「君が代」不起立で戒告処分を受けました。処分取り消しを大阪市人事委員会に請求し、「日の丸・君が代」強制と国旗国歌条例・職員基本条例の是非を問うています。（詳しくは、大阪市人事委員会に提出した陳情書【「大阪市 君が代 陳述書 松田」で検索】を見てください。）また、私の処分撤回と学校に民主主義を実現することを目的とした市民組織「D-TaC」として、「日の丸・君が代」にかかわる事実と「君が代」起立・斉唱が強制されないことを生徒に伝えることを求める学校要請や中学生に「君が代」の意味を伝えるビラ配布活動に取り組んでいます。

ビラを受け取った生徒たちの反応は、「君が代」の歌詞の意味は教えてもらったことがなく、初めて知ったというものがほとんどで、大阪市の「君が代」「指導」が「調教」になっている実態を実感しています。同僚・保護者にも、訴えを知ってもらえれば、私の言い分に道理があると思ってもらえる自信はあるのですが、まだまだ知られていないことが課題です。そして、運動の前進と展望があることを知らせ、あきらめを打ち破り、乗り越えるような働きかけをしていきたいと思っています。

12. 今後の取組みについて

処分を撤回させること、「日の丸・君が代」にかかわる歴史の事実を生徒に伝え、嫌だと思ふ生徒が起立斉唱を強制されない状況をつくることは、国と大企業のためだけの教育、維新の教育支配を打ち破る大きな一歩になるものと思っています。

昨日7月12日、大阪市人事委員会で2回目の準備手続きがありました。処分担当課長と校長、そして請求者である私の3人が証人に決まり、2回に分けて証人尋問が行われる予定です。8月30日の第3回準備手続きで公開審理の日程が決まります。ぜひ、傍聴に来てほしいと思っています。また、中学生ビラまきや学校要請活動への参加も募っています。学校に民主主義をとりもどす活動に、是非、力を貸してください。